

サッカーユース育成年代に対するアウトリーチ活動の意義について  
—神村学園サッカー部へのサポート活動を事例に—

The Significance of Outreach Activities for  
Youth Soccer Teams  
-A Case Study of Support Activities for  
Kamimura Gakuen Soccer Club

深田 忠徳

# サッカーユース育成年代に対するアウトリーチ活動の意義について —神村学園サッカー部へのサポート活動を事例に—

## The Significance of Outreach Activities for Youth Soccer Teams -A Case Study of Support Activities for Kamimura Gakuen Soccer Club

深田 忠徳

### 1. はじめに

2024年2月17日、FUJIFILM SUPER CUP 2024「NEXT GENERATION MATCH」が国立競技場にて開催された。2023 シーズン J1 リーグチャンピオンチームの下部組織である「ヴィッセル神戸 U-18」と第102回全国高校サッカー選手権大会における大会優秀選手を中心に構成された「日本高校サッカー選抜」の対戦は、日本高校サッカー選抜チームが1-0のスコアで勝利した。大会公式ホームページによると、「日本高校サッカー選抜の勝利は、実に6年ぶり。J1リーグ優勝チームの下部組織との対戦となった2020年から数えると、初めてのこと」<sup>1)</sup>となる。

また、その日本高校サッカー選抜に5名もの選手が選出された「青森山田高校」は、高円宮杯 JFA U-18 サッカープレミアリーグ2023 EAST リーグで優勝して、WEST リーグを勝ち上がってきた「サンフレッチェ広島 F.C ユース」とプレミアリーグファイナル（2023年12月10日、埼玉スタジアム2002）を戦った。優勝決定戦は、青森山田が2-1のスコアで勝利し、4年ぶり3度目の優勝を成し遂げた。これまでユース年代では、Jリーグのユースチームが将来有望な選手

を集めて育成し好成績を残すという傾向が見受けられてきたが、学校運動部活動に位置づけられる高校サッカーも負けてはいない。2024年4月6日に開幕する高円宮杯 JFA U-18 サッカープレミアリーグ2024に参加する24チーム中13チームが高校サッカー部となる。前年度の重圧がのしかかった数多くのゲームを経て、2024シーズンの参加チームが決定した。ユース年代の最高峰リーグとされるプレミアリーグにおける参加チームの約半数を高校チームが占めているということや、Jユースチームとの戦いに高校チームが勝ち切っているという結果などから、ユース年代における高校サッカーの影響は大きいといえよう。

そうした高校サッカー界において、近年数多くのタレントを輩出し、ひときわ注目を集めるチームが「神村学園サッカー部」である。関心を向けられる理由については後述することとし、本稿では、神村学園サッカー部に対するサポート活動（ゲーム分析、スカウティング、ミーティング、トレーニング）を事例に、ユース育成年代における年間を通じたアウトリーチ活動の意義について明らかにしていく。

## 2. 2023年度神村学園サッカー一部的特長

神村学園サッカー部（以下、「神村学園」とする）は、2022年度に開催された第101回全国高等学校サッカー選手権大会において当時チームの主将であった大迫塁選手（いわき FC 所属、セレッソ大阪より育成型期限付き移籍）と福田師王選手（ドイツ・ボルシアメンヘングラッドバッハ所属）の「超高校級コンビ」<sup>2)</sup>を擁してベスト4の成績を収めた。また、チームは、高円宮杯 JFA U-18 サッカープレミアリーグ 2022 プレーオフ2回戦 vs. セレッソ大阪 U-18（2022年12月11日、広島広域公園第一球技場）にも勝利し、高円宮杯 JFA U-18 サッカープレミアリーグ2023シーズンより初参戦する権利を勝ち取った。2022年度の戦績を踏まえれば、神村学園はまさにユース年代における全国トップレベルのチームとして位置づけられよう。2022年度に大きく躍進した神村学園は、大迫選手・福田選手の二枚看板が卒業しても、その他の主力メンバーが多数在籍して2023年シーズンを迎えることとなった。

ここでは、その主力メンバーのうち3名を紹介したい。まずは、2023年のチームキャプテンであり神村学園の点取り屋である西丸道人選手（3年、神村学園中等部出身）。高校卒業後には「ベガルタ仙台」へ加入してプロ生活を始める。彼は、2年生時に第101回全国高等学校サッカー選手権大会でその存在感を大いに発揮した。とりわけ、準々決勝の青森山田高校とのゲームでは、自らの積極的なしかけと相手ディフェンダーの股を抜く技ありシュートによってチームの同点弾を叩き込んだ。さらに、その後福田選手が逆転ゴールを決めるが、そのゴールは西丸選手の思い切りのよいシュートからのリバウンドであった。彼の優れた得点能力の高さは、2023シーズンのプレミアリーグ WEST にて得点ランキング2位の14得点という数値が物語っ

ている。ゴールまでのしかけやシュートセンスに加えて、力強い身体を生かしたボールキープ力や豊富な運動量に支えられた前線からの守備力も彼の魅力である。

次に、左サイドを主戦場とする吉永夢希選手（3年、ソレッソ熊本出身）はスピード感に溢れるプレーヤーである。トップスピードで相手DFを置き去りにする縦への突破は、相手チームに脅威を与える。チームの推進力を高める縦突破から繰り出される数種類の正確無比なクロスは、神村学園の数多くの得点場面を演出してきた。クロス以外にも、パンチ力のあるシュートや1vs.1の対人守備など、プレーヤーとしての個人能力は突出しているといえる。「U17日本代表チーム」にも選出されて、2023年11月から開催された「FIFA U-17 ワールドカップ インドネシア 2023」大会でもスターティングメンバーとして活躍している。卒業後は、「KRC ヘンク（ベルギー 1部リーグ）」への加入が公表されており、現在ドイツプロリーグのトップチームで奮闘している福田選手に続き、チームから2例目の欧州プロリーグ所属の選手となる。昨今、高校サッカーからJリーグを経由せずに、欧州のプロチームと契約をする選手が出てきている。こうした流れは、一方で高校サッカーの全体的なレベル向上がみられ選手個々の能力が世界でも通用するレベルに達してきたことを表しているが、他方でJリーグにおける若手選手に対する育成システムや契約制度のあり方などについて再検討する必要性を示唆しているともいえる。本件に関する議論は他に委ねるとして、ただ、今後も「高校サッカー」から「海外プロ」という潮流が確立されてくるのであれば、神村学園はそのパイオニア的な存在となろう。

最後に、神村学園の左サイドで吉永選手とコンビを組むのが、名和田我空選手（2年、神村学園中等部出身）である。神村学園のエースナ

ンバーである⑭を背負う彼は、卓越されたテクニックとインテリジェンスを持ち合わせており、ゲーム展開をコントロールする能力のみならず、重要なゲームにおいて抜群の決定力を発揮する。そのタレント性は同年代において他の追随を許さない。吉永選手とともにU17日本代表チームの一員として出場した「AFC U17アジアカップ タイ2023」（2023年6-7月開催）では、日本代表のアジアチャンピオンに貢献し、自身は「得点王」と「大会 MVP」のダブル受賞となった。また、「FIFA U-17 ワールドカップ インドネシア 2023」では、スペイン戦にて豪快なミドルシュートを決めてみせた。

以上の3名をチームの中心選手として紹介してきたが、そのほかの選手も決して3名に見劣りすることのない才能溢れる選りすぐりのプレイヤーばかりである。神村学園は、対戦相手に脅威を与える攻撃的サッカーを信条とし、そのなかで「人を魅了し、自分たちも楽しいサッカーを追求」<sup>3)</sup>していくチームであり、全国トップクラスに位置づけられるチームの動向には常に関心の目が注がれる。

### 3. サポート活動の概要

2023年シーズンは、ゲーム分析やスカウティング活動を中心に以下のような活動を行った。

- (1) 第44回 鹿児島県高等学校新人男子サッカー競技大会（2023年1月21日）  
：決勝戦「vs. 鹿児島城西」 配信映像によるゲーム分析
- (2) KYFA 男子第44回九州高等学校（U-17）サッカー大会決勝戦（2023年2月21日）  
：決勝戦「vs. 鹿児島城西」 配信映像によるゲーム分析
- (3) 高円宮杯 JFA U-18サッカープレミアリーグ 2023  
：開幕戦「vs. サガン鳥栖ユース」（第1節

- 2023年4月1日）観戦によるゲーム分析
- (4) 第76回 鹿児島県高等学校男子サッカー競技大会（2023年5月27日）  
：決勝戦「vs. 鹿児島城西」 観戦によるゲーム分析
  - (5) 第75回 全九州高等学校サッカー競技大会（2023年6月17-19日）  
：1回戦「vs. 佐賀商業」、2回戦「vs. 長崎日大」、準決勝「vs. 宮崎日大」、決勝「vs. 東福岡」  
準決勝までの3試合は観戦によるゲーム分析、決勝戦は配信映像によるゲーム分析
  - (6) ユースワールドチャレンジサッカー2023（2023年8月16-19日）  
：予選リーグ「vs. 興国」「vs. 奈良クラブ」、順位決定戦「vs. 昌平」  
チーム帯同によるゲーム分析・ミーティング
  - (7) 高円宮杯 JFA U-18サッカープレミアリーグ 2023  
：「vs. 横浜 FC ユース」（第20節11月19日）、「vs. 東福岡」（第21節11月26日）、「vs. 履正社」（第19節11月29日延期分）  
映像によるスカウティング、ミーティング、トレーニング
  - (8) 第102回全国高校サッカー選手権 鹿児島県大会（2023年12月15-16日）  
：決勝戦「vs. 鹿児島城西」 スカウティング、ミーティング
  - (9) 第102回全国高等学校サッカー選手権大会（2023年12月30日-2024年1月4日）  
：2回戦「vs. 松本国際」、3回戦「vs. 神戸弘陵」、準々決勝「vs. 近江」  
スカウティング、ミーティング

神村学園へのサポート活動については、2022年度の第101回全国高等学校サッカー選手権大

会におけるスカウティングスタッフとして携わらせていただいたのがスタートとなる。そうしたことから年間を通じたサポートについては、2023年シーズンが初めてとなる。チーム帯同の際には、神村学園の有村圭一郎監督からの依頼を受けて参加させていただいた。その他の重要なゲームなどは、試合会場に可能な限り出向いて直接的観戦によってゲーム分析を行った。また、新人戦や高円宮杯 JFA U-18サッカープレミアリーグ 2023 (以下、「プレミアリーグ」とする)のゲームなどは、直接的な観戦による分析ができなかったために、映像などをとらえて分析を行った。こうした継続的な分析によって、神村学園におけるチーム戦術の変化や成熟度を把握するとともに、それぞれのプレーヤーの特徴や成長過程についても認識していくことが可能となった。そのことで、どのような期間に依頼があったとしても、いつでもスムーズにチームに入っていけるような態勢が整えられていた。

継続的なチームへの関与によって、選手との良好な関係構築がもたらされる。ミーティングやトレーニングの際には、積極的に質問をしていく選手が増えてきた。選手らのサッカーに対する真剣なまなざしと情熱は、こちらの指導者としての責任感と使命感を駆り立てる。おのずと選手への愛着も沸いてくる。

そうした日本サッカーの未来を担っていく若者たちが危険な目にさらされることだけは断じて看過することはできない。2023年度における神村学園を巡る「公式戦の大会スケジュール」は、憂慮すべき事態であったといえる。プレミアリーグ2023第7節(5月20日)は、名古屋グランパス U-18との対戦がトヨタスポーツセンター(愛知県)にて開催された。その翌日には、第76回 鹿児島県高等学校男子サッカー競技大会が開催され、1回戦がシード校であった神村学園は2回戦(5月22日)から登場し、5月24日

を除いて、5月27日の決勝まで連戦が続いた。そして、全国総体出場を決めたその翌日には、プレミアリーグ2023第8節(5月28日)が、ヴィッセル神戸 U-18といぶきの森球技場(神戸市)にて開催された。神村学園は、「9日間で公式戦7試合」を戦い、そのなかにはインターハイ予選といった選手にとってたいへん重要な試合も含まれていた。この試合数と県外への移動からくる疲労は、成長期である選手たちの身体へ著しいダメージを与えたであろう。選手生命が脅かされるような怪我が生じることさえも危惧される状況にあった。今回のケースから、プレミアリーグおよび鹿児島県大会を管轄・運営する機関には、日本サッカー協会が提唱する「Players First!」の視点が著しく欠如していたといえる。サッカーファミリーである我々は、コロナ禍を経て、状況に応じて大会のレギュレーションを変更する柔軟性や試合順延を受け入れるフェアプレーの精神を培ってきたはずである。鹿児島県総体の決勝戦終了直後に、表彰式にも参加できずにプレミアリーグが開催される神戸へとすぐに移動していった神村学園の選手たちの様子を、関係者らはどのように見てたのであろうか。早急な改善が望まれよう。

年間を通じて多くの活動をしてきたが、「スカウティング」「ゲーム分析」「ミーティング」が主たる活動内容であった。スカウティングでは、対戦チームにおける「システム」「ストロングポイント」「ウィークポイント」「攻撃パターン」「セットプレー」などの観点から分析を行った。また、プレミアリーグや第102回全国高等学校サッカー選手権大会(以下、「第102回選手権」とする)では、神村学園のゲーム分析をとらえて、ゲームにおける「Good Play」と次戦に向けた「改善点」などを選手たちへ明示していくことに注力した。とりわけ、ミーティングでは、「スカウティングの内容報告」以上に「改

善点の提示」には、昨年引き続き細心の注意を払った。監督やコーチングスタッフのチーム戦術の意図をしっかりととらえていなければ、選手たちに誤った情報を提示してしまい、チームの混乱を招いてしまう可能性があるからだ。したがって、監督やコーチングスタッフに事前に内容確認をしていただき、スタッフ間でチーム戦術の共有を図ったうえで選手たちへミーティングを行った。年間を通じたサポート活動によって、チーム戦術の細部までを理解することができていたことや、選手らの個々のパーソナリティや技術レベルも把握できていたということから、より精緻化された分析内容を提示することが可能となった。「年間を通じたフォローアップ」は、チームにプラスに作用する。すなわち、そこでの継続的なアウトリーチ活動はチームにとって有益な効果をもたらすものであるといえる。

本稿では、それぞれの活動の詳細について説明することは割愛し、「全国ベスト8」の結果となった第102回選手権におけるサポート活動について明示していく。大会では3試合を行ったが、それぞれのミーティングにて用いた資料を提示しながら、対戦相手に応じた戦術プランにおける要点を中心に説明していく。ただし、ユース育成年代ということを配慮し、対戦チームにおける選手のウィークポイントなどについては本稿では取り扱わないこととする。以下、選手は、「チーム略称、背番号」（例：「神村⑩」）の形式で表記していく。

## 4. 第102回全国高等学校サッカー選手権大会におけるゲーム分析

### 4-1. vs. 松本国際高校（長野県代表）

結果：2-0 勝利

神村学園にとって、第102回選手権の初戦（シード校のため2回戦から出場）の相手は、長野県代表「松本国際高校」であった。松本国際の基本システムは、「1-4-2-3-1」（図1）であった。攻撃では、トップ下にポジションをとる「松本国際⑩」が攻撃のアクセントをつけて、

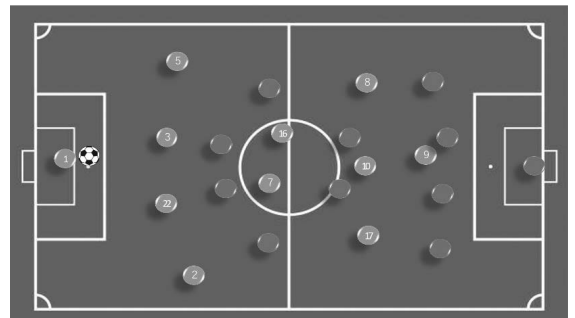


図1 松本国際の基本システム（1-4-2-3-1）

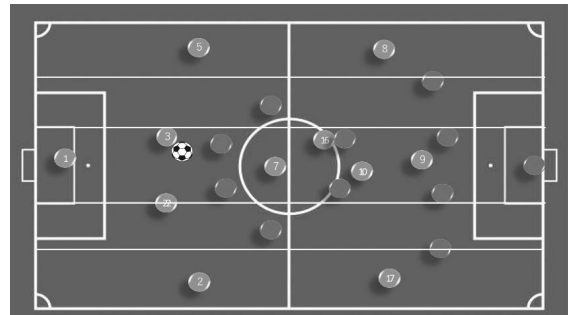


図2 松本国際の攻撃時システム（1-4-1-2-3）

まとめ	
●守備	
(1)CMF⑩からの攻撃：	
スモールエリアの突破・ためを作って攻撃	
⇒⑩ポジション確認、タイトな守備。	
周辺の前向き選手のチェック	
(2) SHFの突破：右MF⑭⑧②,左MF⑧⑪	
⇒複数でしぶとく、背後を取られない	
(3) CBからSMFへ（起点狙い）	
⇒FWからの積極的な守備（インテンシティ）	

図3 松本国際戦のポイント

起点となっていた。技術力の高い彼にボールが収まると、周辺のMFが一気に追い越すような攻撃を仕掛けてくるのが特徴であった。また、攻撃時には中盤の形を変えて、ワンアンカーとツーシャドーのシステムを多用していた(図2)。そのため、「松本国際⑩」に対しては、距離を詰めてタイトに守備にいくことや相手の中盤MFの人数を確認しながらマークをすることなどを提示した。

さらに、両サイドのMFによる突破やCBからのサイドMFへのロングパスについても対応するように説明した(図3)。試合では、そうした点について選手は着実に対応しており、優位にゲームを進めることができていた。

松本国際守備については、DFが全体的にボールサイドに寄りすぎるポジションニングをとる傾向があったので、どちらかのサイドを突破した際には、必ずアザーサイドの選手が仲間を信じて走りこむことを提示していた。実際の試合では、前半の早い段階で、右サイドをコンビネーションによって崩し、最後は逆サイドでフリーな状態で走りこんだ「神村⑭」が先制点を決めた。神村の戦術的に意図したゴールであった。チームは、その勢いそのまま追加点を奪い2-0で勝利した。

#### 4-2. vs. 神戸弘陵学園 (兵庫県代表)

結果：2-1 勝利

3回戦は、兵庫県代表「神戸弘陵学園高校」との対戦であった。神戸弘陵のシステムは、「1-4-2-3-1」(図4)であった。神戸弘陵の攻撃の中心は、スピードのあるドリブルを武器とする左MFの「神戸弘陵⑩」である。彼は足元の技術レベルが非常に高く、スピードに乗ったドリブルでの仕掛けなどは脅威であった。チームとしては、彼がボールを保持したら右のサイドバックだけではなく、右MFのプレスバック

によって2名で対応するようにした。内側を切り、縦に誘導するようなディフェンスの方法を共通で認識した。

また、神戸弘陵は、ビルドアップ時に左サイドバックの「神戸弘陵⑤」が内側のポジションに移動して、「1-3-4-2-1」のシステムを形成する(図5)。そして、サイドの選手への縦パスをワンタッチでフリックしてそこから中央突破を図るシーンが見受けられた。神戸弘陵は、2回戦 vs. 前橋育英でも同様のパターンからゴー

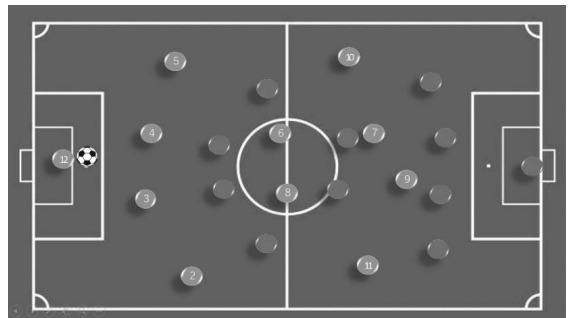


図4 神戸弘陵の基本システム (1-4-2-3-1)

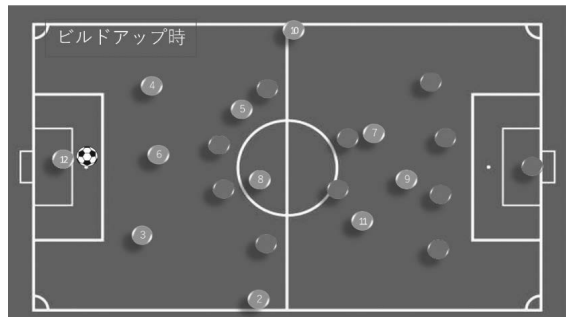


図5 神戸弘陵の攻撃時システム (1-3-4-2-1)

まとめ	
●	守備
(1)	左MF⑩の突破： ⇒右MFプレスバックの意識、複数でしぶとく
(2)	サイドのフリックから中央突破：SB⇒SMF⇒TOPへ ⇒1stDFアプローチの工夫、VOのポジション、 通された後のプレスバック&DF対応
(3)	ショートカウンター：コンパクトDF&トランジション ⇒ワンタッチプレー、飛ばしのパス、粘り強い守備

図6 神戸弘陵戦のポイント

ルを決めている。そこで、神村の対策としては、そのフリック場面における1stDFアプローチを通常より内側にした。また、ボランチのポジションを相手へのマークではなく、サイドから入れられる相手のシャドーやトップへのパスラインを消すようなポジションニングに変更した。仮に、フリックパスを通されたとしてもMFのプレスバックとDFとのパッキングで対応するようにした。

他にも、相手のショートカウンターについては、できるだけコンパクトディフェンスを保ちながらトランジションの意識を高めるように投げかけた(図6)。

実際のゲームでは、神戸弘陵のストロングポイントに対して選手たちが本当に粘り強く対応した。神戸弘陵の圧倒的な攻撃力に攻め込まれる時間が続いたが、最後まで集中力を切らさずに守り切ったことが勝因であった。

#### 4-3. vs. 近江高校 (滋賀県代表)

結果：3-4 敗退

準々決勝は、滋賀県代表「近江高校」との対戦となった。近江のシステムは、「1-3-6-1」であった(図7)。とりわけ、左CB「近江⑩」(状況によっては左WB or Vo)の攻撃参加は、神出鬼没でどこからでも攻めあがってくる攻撃であった。チームへは、その攻撃のタイミングが読みづらいこともあり、常に彼のポジションングを把握して、「マークの確認と1stDFの決定」をしっかりと行うように提示した。また、彼だけでなく近江の選手はテクニカルであったために、相手との間合いを詰めていくような「タイトな守備」を要求した(図8)。

また、トップの「近江⑨」&シャドーの「近江⑧⑪(⑭)」のコンビネーションについても提示した。具体的には、トップがサイドへ流れるパターンやシャドーポジションの選手がペナ

ルティエリア「ポケット」へ侵入してくることなどを伝えた。その際には、神村のボランチ&DF・GKの連携で守るように、CBがサイドへつり出されたときのスペースの埋め方やDF間の横へのスライドなどについて映像を用いてレクチャーした。相手のシステムからなる攻撃枚数と守備の人数を照らし合わせたときにアザーサイドが気になった。そこで、「クロス時アザーも意識」することを伝えたが、残念ながら相手のアザーサイドからの技ありシュートで先制点を奪われる形となった。しかしながら、前半のうちに逆転に成功し、終始主導権を握りながら前半を終えた。

後半は一方向的に近江のゲーム展開となった。とくに、近江の「人を追い越しながらのコンビネーション」は、自由なポジションングもあり、なかなか対応することができないでいた。神村学園の「1-4-4-2」システムに対して、「1-3-6-1」システムへの対応のしかたを具体的

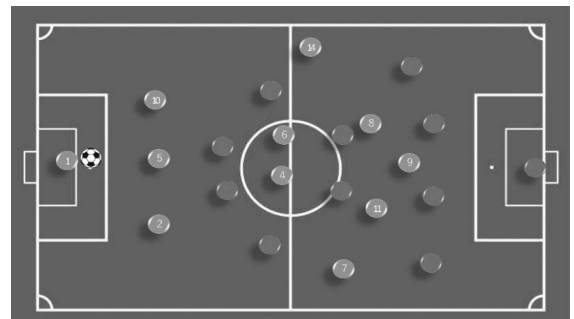


図7 近江の基本システム (1-3-6-1)

まとめ	
●守備	
(1)左CB⑩(左WB or Vo)の攻撃参加	⇒マークの確認と1stDFの決定、タイトな守備
(2)トップ⑨&シャドー⑧⑪(⑭)の関係性	トップ：サイドへ流れる シャドー：ペナ「ポケット」へ侵入 ⇒ボランチ&DF・GKの連携で守る。 クロス時アザーも意識
(3)人を追い越しながらのコンビネーション	原則：「中から外へ」の意識、粘り強い守備

図8 近江戦のポイント



に伝えておくべきであったと反省している。「1-4-2-2-2」で構える方法や、相手が8人で攻撃してきた場合にミラーゲームへと切り替えるためのポジション変更の方法などについて落とし込めていなかった。結果的に相手との不具合を解消できないままゲームは逆転され、そのまま終了となった。

## 5. まとめ

第102回選手権は、準々決勝で対戦した「近江」が決勝まで進み、「青森山田」と対戦した。結果は、青森山田が3-1で勝利し、通算4度目の優勝を飾った。青森山田の「試合運びのうまさ、成熟度の高さ」<sup>4)</sup>が際立った大会となった。本大会における神村学園は、「ベスト8」という結果で終わった。「国立」で昨年大会の借りを返すことを目標にしていたが、国立を目前にして敗退した。近江戦については、「超高校級」トリオによる3発競演だったが、空砲に終わった<sup>5)</sup>とメディアが報じている。チームスタッフの一員として、責任を感じている。選手とともにこの悔しさを経験したことは大きい。今回の反省を生かして、次年度につなげていきたいと考えている。

本稿では、神村学園への年間を通じたサポート活動について述べてきた。目標としていた結果には届かなかったが、各試合のゲーム分析やスカウティングを継続的に実施してきたことで、チームや選手の個々のレベルアップに少なからず貢献できたと考えている。日頃の研究によって得られた知見や研究成果を社会に還元していくことが大学人の使命でもある。そうした点において、神村学園に対する継続的なアウトリーチ活動は意義があるものであったといえる。

2024シーズンはすでに始まっている。2024年2月に開催された「KYFA 男子第45回九州高等

学校 (U-17) サッカー大会」において、神村学園は12年ぶりに優勝の栄冠を勝ち取った。まだシーズンの序盤ではあるが、選手のなかにはこの結果によって自信を深めた者もいたであろう。情熱をもって本気で取り組む高校生が少しのきっかけで成長し、そして人間的にも逞しくなっていく姿を間近で触れることができるのは、たいへん貴重な機会である。安藤は、「高校サッカーが日本のサッカー界において重要な育成組織である」<sup>6)</sup>ことを示唆している。ゆえに、ユース育成年代において、真剣に「全国優勝」を目指すトップレベルの高校チームをサポートすることはたいへん意義深く、そしてその責任は重い。

## 文献

- 1) FUJIFILM SUPER CUP 2024公式ホームページ (2024年3月5日閲覧).  
[https://www.jleague.jp/supercup/2024/ng\\_match/](https://www.jleague.jp/supercup/2024/ng_match/)
- 2) number web (2023年1月8日).  
<https://number.bunshun.jp/articles/-/856119>
- 3) 神村学園サッカー部公式ウェブサイト.  
<https://kamimura-football.com/overview/>
- 4) サッカーマガジン2月号増刊, 高校サッカー 2024 第102回全国高校サッカー選手権大会決算号.  
2024年1月12日発行.  
 (株)ベースボール・マガジン社, P.24.
- 5) 日刊スポーツホームページ (2024年1月4日)  
<https://www.nikkansports.com/soccer/news/202401040000744.html>
- 6) 安藤隆人「高校サッカー記者コラム」サッカークリニック (第30巻 第13号)  
2023年11月6日発行.  
 (株)ベースボール・マガジン社, P.65.